

# 日本の初級中国語教科書における練習問題

## についての一考察

—12冊の教科書調査を通して—

許 挺傑

キーワード：初級中国語教科書、練習問題、日本、教科書調査

### 1. 研究背景

中国語教科書において、練習問題の質が教科書を評価するうえで大きなポイントになっており（趙 1998, 刘・汪 2003）、教科書全体の良し悪しを大きく左右するといっても過言ではない。

日本の中国語教育において、教科書の文法項目や語彙などに関しては、以前からその重要性が認識されており、多くの研究がなされてきた。しかし、教科書の重要構成である練習に関しては、あまり研究されていないのが現状である。実際に日本の中国語教育において中心的な役割を果たしている『中国語教育』の論文（2003年の1号から2017年の15号までの171編の論文）を調査したところ、教科書練習に関して部分的な言及はあるものの、

練習そのものに焦点を当てた調査研究は残念ながら一つもなかった。年次大会で開催された教科書に関するシンポジウム等の内容をまとめた論文でさえも同じ状況であった。

教科書の練習部分は、いわばインプットの知識をアウトプットさせる装置であり、その装置が有効かどうかは学習成果に大きく影響する。教師側においても、教科書の練習部分は、授業活動を考えるうえで欠かせないものであり、授業の質にも影響しうる。このように教科書の練習は、様々な意味で重要であるにもかかわらず、日本の中国語教育において、あまり研究が見られないのは実に残念である。本研究は状況打破の第一歩として、探索的に日本で出版され、常用されている初級中国語教科書（12冊）を対象に、これらの教科書における練習の量や質などについて分析を試みたい。

以下、第2節では先行研究について述べ、第3節では分析対象と分析手法について述べる。そして、第4節と第5節においては、調査結果の報告とそれに対する考察を述べる。最後の第6節では、まとめと今後の課題について述べる。

### 2. 先行研究

第1節でも述べたように、日本の中国語教育において、教科書練習に焦点を当てた研究は非常に少なかった。そこで、日本の中国語教育と関係の深い中国の中国語教育関係の文

献を調査したところ、練習問題に焦点を当てた研究が 80 年代の初頭から行われていることが明らかになった。ここでは、まず中国における中国語教科書練習問題についての先行研究をまとめ、後に日本の状況を述べることにする。

## 2.1 中国における中国語教科書練習問題についての先行研究

この節では、中国における中国語教科書練習問題についての研究を概観しておく。研究は、大きく分けて、以下の 5 つの領域にまとめられる。

第 1 に、練習設計の原則や練習の分類などに関する研究である。例えば、郭他（1995）では、練習設計の原則について「4 つのなければならない」を提示している。教科書の練習は教科書を使っている学習者のためにならなければならないし、教科書を使って授業を行う教師のことも考えなければならない。また、教科書の練習は授業活動の展開に役に立つものでなければならないし、学習者の技能訓練にも有益なものでなければならないとしている（p91）。そのほか、刘（2009）、周・唐（2004）などがある。

第 2 に、授業の類型からみる練習の在り方に関する研究である。例えば、史他（2013）では、リスニング教材における練習の在り方について検討している。

第 3 に、練習形式に焦点を当て、それぞれの良さや限界、注意点などに関する研究である。例えば多肢選択問題（刘 1996）や文完成問題（刘 1999）などがある。

第 4 に、特定の文法項目との関連で行う研究である。例えば、中国語学習者にとって、習得が難しいとされる「把」の句型に関して、どのような練習問題を考えたらいいかに関する研究（刘・汪 2003）がある。

第 5 に、その他の観点、例えば、練習の有効性に関する研究（杨 2010）や、教科書評価との関連で述べている研究（赵 1998）、学習ストラテジーと練習の関係に注目した研究（陈・杨 2015）、教科書の練習問題と試験問題の関係に関する研究（方・李 2015）などがある。

このように、中国の外国人向け中国語教育研究においては、教科書の練習に関しても、かなり多くの研究があり、これらの知見は今回の研究において大いに参考となった。

## 2.2 日本における中国語教科書練習問題についての先行研究

この節では、日本の先行研究を概観する。先ほども述べたように、日本の中国語教育研究では、教科書に関する研究は比較的多く見られるものの、練習部分に焦点を当てた研究は管見の限り、ほとんどなく、部分的な言及しかないというのが現状である。

例えば、史（1997）は日本の中国語教育の問題点について論じている中で、教科書について「日本で出版された教材のかなりのものがない加減で、文法の説明や練習が不足していたり全くなく、目標が定まらず実践的でなく、科学的でもない」と批判している。

また、石（2004）は、日本の中国語教科書の出版状況について論じている中で、教科書の練習について「出版された教科書の多くは、第二外国語学習用のものであり、1 年間の使

---

<sup>1</sup> 中国語の論文であるが、この文の訳は町田（2004）のものを援用した。「」は筆者による。

用を想定している。練習の量は、多いものと少ないものがあり、多いものは教科書本体の他、付属の練習ノートもあるが、少ないものは、1課につき、5～10問程度のものとなっている」と言及している (p107)。

また、侯 (2012) では、中国語教科書に見られる不自然な点という研究の中で、文法の練習に厳密さが欠けているものがあると指摘している。しかし、この研究はあくまでも教科書全体に焦点を当てており、調査した教科書も著者自身が実際に使用した数冊の教科書だけとなっているため、研究そのものがケーススタディの性質が強い。

以上のように日本の中国語教育において、教科書研究は比較的盛んであるものの、教科書の重要構成である練習部分に関しては、あまり研究されていないのが現状である。

### 3. 分析対象と分析手法

#### 3.1 分析対象

この節では、本研究の分析対象の教科書について述べる (表 1)。

これらの教科書は以下の点において共通している。

- ①比較的最近出版されたもので、なおかつ、比較的多くの利用がある。
- ②初めて中国語を学ぶ学生のために作られている。
- ③いわゆる中国語専攻の教科書ではなく、第二外国語としての中国語<sup>2</sup>授業での使用を想定されていると思われる。
- ④教科書シラバスは文法シラバスである。

一方で、教科書によっては、編集方針や目標が異なるものがあることも断っておく。例えば、『ちょっとまじめに中国語』は、基本的な発音と基本的な文法を学ぶことが主たる目標であるのに対し、『すぐ話せる中国語』は従来の文法訳読方式ではなく、外国語学習本来の目的である「言語を使って意志を伝える」ことにこだわったとしている。また、教科書の目標に関して特に明示されていない教科書もある。このように教科書の編集方針等が異なることによって、使用される練習項目において何らかの相違が生じることは想定される。

本研究は教科書の練習が様々な意味で重要であるにもかかわらず、日本の中国語教育において、あまり研究が見られないことを受け、その状況打破の第一歩として、まず探索的に日本で常用されている初級中国語教科書 (特に第二外国語としての中国語教育で利用されている教科書) を分析し、その概要的な特徴を把握するのが目的であるため、編集方針によって、練習項目がどう異なるかに関しては今後の研究課題として取り組むことにする。

---

<sup>2</sup> 清原 (2015) で述べているように、第二外国語としての中国語は一般に週に1～2コマ (1コマ90分) ×1年間 (30回) 程度の時間数しかなく、1クラスあたりの学生数も多くなりがちである。このことに関しては、4節・5節でさらに詳しく述べていく。

【表 1】 調査対象の初級中国語教科書

NO.	著者	教科書名 <sup>3</sup>	出版社	初版と再版
1	日下恒夫・史彤嵐	ちょっとまじめに中国語	同学社	2001年、2012年第9刷
2	児野道子・鄭高詠	楽楽中国語	郁文堂	2002年、2004年第6刷
3	刘颖・喜多山幸子・松田かの子	1冊目の中国語会話クラス	白水社	2008年、2015年第9刷
4	杨凯荣・张丽群	新・中国語の船出	朝日出版社	2003年、2008年改訂版
5	董燕・遠藤光暁	ともだち・朋友 ートータル版ー	朝日出版社	2009年、2012年第4刷
6	喜多山幸子・鄭幸枝	はじめまして！ 中国語	白水社	2009年、2016年第21刷
7	竹島金吾・尹景春・竹島毅	<最新2訂版> 中国語はじめの一步	白水社	2012年改訂版、 2016年第16刷
8	内田慶市・张轶欧	極める中国語	同学社	2012年、2017年改訂版
9	本間史・孟広学	中国語ポイント 55	白水社	2007年、2014年20刷
10	胡金定・吐山明月	すぐ話せる中国語 (改訂版)	朝日出版社	2009年、2012年第3刷、 2016年改訂版
11	方如偉・王智新・鏗屋一	新版・中国語 10 課	白水社	2003年、2016年25刷、
12	渋谷裕子・孟若燕	新訂 キャンパス的中国語	同学社	1999年、2006年改訂版、 2017年改訂版

### 3.2 分析手法

この節では、分析手法について紹介する。

ステップ①、各教科書の基本データを整理する。教科書の基本データとは、本文の頁数（単語や会話）、文法解説の頁数、練習の頁数、1課で扱う文法の項目数、練習項目数などである。詳細は第4節で紹介するが、今回の12冊の教科書の中では、全部で890もの練習項目<sup>4</sup>がある。本研究ではこの890もの練習項目について、質的・量的な分析を行う。

ステップ②、各教科書における練習の類型を集計し、教科書ごとの練習の基本状況をまとめる。具体的には、それぞれの教科書において、何種類の練習があるか、どのような種類の練習が多いかなどの情報をまとめる。なお、練習の種類については、主に練習の指示（学習者に何をさせるか）や何を使って練習させるか（音声、イラスト、文字など）を中心に分析している。具体例はこの節の最後で示す。

<sup>3</sup> 以下では、便宜的に1～12の教科書を次のように標記する。『まじめ』『楽』『1冊目』『船出』『ともだち』『はじめまして』『一步』『極める』『ポイント』『話せる』『10課』『キャンパス』。

<sup>4</sup> 教科書によっては、本体とは別に練習冊子もあるが、今回は分析に入れていない。

ステップ③、12冊の教科書における練習の情報をすべてまとめる。  
 ステップ④、先行研究の知見を援用しつつ、ステップ③の全体情報について分析を行う。  
 以下では、本研究での教科書の練習項目についての集計方法を紹介する（表2）。

【表2】教科書練習項目の集計方法

教科書名	練習項目	数量/課	種類/課
船出	①下線部分を置き換えなさい。	1	1
	②（ ）に適切な語句を入れ、日本語に訳しなさい。	1	1
	③発音を聞いて、ピンインで書きとりなさい。	1	1
	④次の日本語を中国語に訳しなさい。	1	1
計		数量/冊	種類/冊
16課		4×16=64問	4種類
教科書名	練習項目	数量/課	種類/課
10課	①下線部を他の語に置き換えて、練習しましょう。	1	1
	②中国語に訳しましょう。	1	1
	③暗唱しましょう。	1	1
	④絵を見て答えましょう。	1	1
計		数量/冊	種類/冊
10課		4×10=40問	4種類

表2では、『船出』と『10課』を例に説明している。『船出』は全部で16課あり、それぞれの課の練習はすべて①～④の形式である。練習項目の量は課によって異なることなく、すべて同じである。そのため、この教科書では全部で4種類の練習項目があり、全体項目数が64となる。また、『10課』も『船出』と似た構成であり、全部で4種類の練習項目があり、全体項目数が40である。

では、2冊の情報を統合するとどうなるかを見よう。練習の量は、64問+40問=104問になるが、練習の種類は、『船出』の①と④が、それぞれ『10課』の①と②と同じタイプの練習であるため、種類の合計は、8ではなく、6種類になる。

## 4. 調査結果

### 4.1 文法項目数と練習項目数について

この節では、文法項目数と練習項目数を中心に述べる（表3）。

表3では、今回の調査対象となった12冊の教科書の基本データを示している。表3の最後の1行の「平均」を見るとわかるように、12冊の教科書は平均で16課からなっており、

本文、文法、練習の頁数の比が 1.3:1.3:1.7 となっている。また、1 課の文法項目数は平均 4.2 で、それに対して、1 課の練習項目数の平均は 5.3 で、課の練習項目数を課の文法項目数で割ると 1.26 という数字が出る。つまり、1 課において、練習項目数とその課で導入されている文法項目数よりわずかに上回っていることがわかる。

【表 3】教科書の基本データ

教科書	課数	本文 頁数	文法 頁数	練習 頁数	文法数 /課	練習数 /課	課練習数/課文法数
ポイント	16	1	2	1	3	6.8	2.27
1 冊目	15	1	1	2	4	8.1	2.03
はじめまして	12	1	2	1	4	6.9	1.73
ともだち	21	1	1	2	3	5	1.67
キャンパス	18	1	1	1	4	5.1	1.28
極める	12	2	2	2	5	6.2	1.24
話せる	10	1	2	3	6	7	1.17
10 課	10	1	1	2	4	4	1.00
一歩	13	1	1	1	3	2.8	0.93
楽	11	2	1	2	5	4.3	0.86
船出	16	2	2	2	5	4	0.80
まじめ	16	2	1	1	4	3	0.75
平均	16.2	1.3	1.4	1.7	4.2	5.3	1.26

また、さらに細かく見ると、12 冊の教科書において、「課練習数/課文法数」が一番大きいものが 2.27 で、一番小さいものが 0.75 となっている。つまり、教科書の練習項目数は、多くても 1 文法項目に対して 2 項目の練習問題で対応しており、少ない場合は、1 文法項目に対して 1 項目にも満たない練習問題で対応している。また、1 未満と 1~2 と 2 以上の教科書数はそれぞれ 4 冊、6 冊、2 冊となっている。

このように、12 冊の教科書において、導入される文法項目に対して、練習項目数は多いとは言えず、これらの練習（教科書の内容）だけでは、どれほどの学習効果が期待できるか少し疑問が残る。

## 4.2 練習項目の種類と練習項目数について

この節では、練習項目の種類と練習項目数について見ていく。表 4 は 12 冊の教科書における練習の項目総数と種類の情報をまとめている。1 行目の最後の「種類/課練習数」の数値の高い順で教科書を並べている。

【表 4】教科書練習の種類について

教科書	文法数 /課	練習数 /課	課練習数 /課文法数	練習 項目数	練習 項目種類	種類/ 課練習数
キャンパス	4	5.1	1.28	92	24	4.7
楽	5	4.3	0.86	47	16	3.7
1 冊目	4	8.1	2.03	121	21	2.6
一步	3	2.8	0.93	37	6	2.1
はじめまして	4	6.9	1.73	83	11	1.6
極める	5	6.2	1.24	74	9	1.5
ポイント	3	6.8	2.27	109	9	1.3
ともだち	3	5	1.67	105	5	1.0
話せる	6	7	1.17	70	7	1.0
船出	5	4	0.8	64	4	1.0
まじめ	4	3	0.75	48	3	1.0
10 課	4	4	1	40	4	1.0
平均	4.2	5.3	1.26	74.2	9.9	1.9

教科書練習項目数の平均が 74.2 であり、最も多いのは『1 冊目』の 121 問で、最も少ないのは『一步』の 37 問である。両者の間には実に 3 倍以上の差がある。また、12 冊のうち、平均 74.2 以上の教科書は 5 冊で、平均以下の教科書は 7 冊であった。これらの教科書の多くは、1 年間の使用を想定しており、年間 30 コマの授業で平均 74 問の問題で考えると、1 コマ 90 分の授業において、教科書が用意した練習は 3 問未満であるということになる。

さらに、種類で見ると、平均 9.9 種類で、最も多いものが『キャンパス』の 24 種類で、最も少ないのが『まじめ』の 3 種類である。両者の間には実に 8 倍もの差がある。また、「種類/課練習数」という項目を見ると、平均が 1.9 であることがわかる。この数字は大きければ大きいほど、教科書全体の練習形式の多様性があることを示している。

例えば、『10 課』『まじめ』『船出』『話せる』『ともだち』の 5 冊の場合、5 冊ともに、「種類/課練習数」は 1 であり、また、「練習項目種類」はそれぞれ 4、3、4、7、5 であり、どれも平均の 9.9 種類を大きく下回っている。つまり、これらの教科書は、練習の種類が少ないうえに、課の内容によらず、すべて同じ形式の練習をとっているため、多様性という意味において、課題があるように思える。実際に、先ほども述べたように、これらの教科書は基本的に 1 年間の使用を想定しているため、1 年間の授業で毎回同じ練習問題をさせられると、学生に飽きられてしまう恐れがあり、学習効果にも悪い影響を来す可能性が十分にあると思われる。

以上のように、12冊の教科書の練習項目数と練習項目種類などの集計結果を見ると、教科書によって、ばらつきはあるものの、全体的に練習の量と種類が少ないということが言えるのではないかとと思われる。

### 4.3 練習形式について

この節では、12冊の教科書において、全体的にどのような練習形式が多かったのかについて紹介する。表5では、割合の多い順に練習形式を並べている。

【表5】教科書練習の形式について

多い順	練習形式	量	割合	割合
①	翻訳（日本語→中国語）	137	15.4%	1～10 の割合 75.5%
②	置き換え練習	101	11.3%	
③	単語を並べかえ、文を完成させる	71	8.0%	
④	文、会話の朗読、もしくは暗唱	70	7.9%	
⑤	CDを聞き、ピンインを付け、漢字を書く <sup>5</sup>	55	6.2%	
⑥	CDを聞き、問題に答える	54	6.1%	
⑦	CDを聞き、正しい答えを選ぶ	51	5.7%	
⑧	CDを聞き、空欄を埋める	49	5.5%	
⑨	提示されたピンインの漢字を書き、さらにそれ（単語、文）を日本語に訳す	43	4.8%	
⑩	指示に従って、文の形を変える	41	4.6%	
⑪	文を見て、空欄に正しい言葉を入れる	35	3.9%	
⑫	指示に従って、絵を見て質問に答える	26	2.9%	
⑬	問題を読み、質問に答える <sup>6</sup>	22	2.5%	
⑭	教科書会話に基づいて、質問に答える	21	2.4%	
⑮	CDを聞いて単語を覚える	20	2.2%	
⑯	翻訳（中国語→日本語）	18	2.0%	
⑰	CDを聞いて、質問を書き取り、その後答える	12	1.3%	
⑱	以下の漢字を正しく書く	12	1.3%	
⑲	日本語の指示に従って、文の空欄を埋める <sup>7</sup>	11	1.2%	
⑳	絵を見て単語を覚える	10	1.1%	21～32
㉑	以下の漢字を使って、8つのフレーズを作る	10	1.1%	

<sup>5</sup> 「漢字の意味も書く」練習も同じタイプとしてカウントしている。

<sup>6</sup> 学生自身のことに関する問題。

<sup>7</sup> 「さらにそれに基づいて会話をする」練習も同じタイプとしてカウントしている。



⑫	提示の質問を使って、相手に質問する <sup>8</sup>	8	0.9%	の割合 3.5%
⑬	絵を見て空欄を埋める（結果補語を埋める）	4	0.4%	
⑭	相手と挨拶をし、自己紹介を行う	1	0.1%	
⑮	ピンインと簡体字を使って、名前と学校名を書く	1	0.1%	
⑯	以下の文の「吧」の使い方を判断する	1	0.1%	
⑰	氏名と学校名の書き方やピンインを調べ、読む	1	0.1%	
⑱	以下の内容を読み、下線部を、自分を表現する言葉に変える	1	0.1%	
⑲	CD を聞き、絵を見て日本語文を書く	1	0.1%	
⑳	CD を聞き、指示に従い、文を作る	1	0.1%	
㉑	例にならって、絵を見て買い物の練習をする	1	0.1%	
㉒	例にならって、値引きの練習をする	1	0.1%	
計		890	100%	

表 5 を見てわかるように、12 冊の教科書における練習項目の総数は 890 であり、種類はトータルで 32 種類にまとめることができる。

トータルで 32 種類の練習があり、多いように見えるが、実はトップ 10 だけで全体の 7 割以上を占めている結果となっている。具体的に言うと、1 位から 10 位までの練習が全体のおよそ 75.5% を占めており、11 位から 20 位までの練習が 21%、そして、21 位から 32 位までの練習が 3.5% を占めている。このことはどの教科書にも共通してみられる練習が多くあることを意味している。

ここでは、表 5 のトップ 10 の練習の特徴を観察してみることにしよう。

これらを観察することで、日本の初級中国語教科書の特徴をある程度把握することが出来るだろう。日本の初級中国語教科書では、主に学生たちに「翻訳 (①、⑨)」をさせたり、単語や単文レベルでの操作 (②、③、⑩) をさせたり、文や会話の朗読 (④) をさせたり、ピンインをもとに漢字を書かせたり (⑧) している。また、CD の活用 (⑤、⑥、⑦、⑧) も多く見られる。

## 5. 結果の考察

### 5.1 練習の分類や練習設計の原則との関連

練習の分類については、これまで多くの研究者によって、様々な分類法が提示されている。周・唐 (2004) では、視点別で複数の分類が可能だとしている。例えば、授業中かどうかという視点で、教科書の練習を授業中練習と授業外練習とに分けることが出来る。授業中の練習は、教えた内容を即時に復習したり、補強したり、教育効果に対してすぐにフ

<sup>8</sup> 学生自身のことに関する質問。

ードバックが得られるようなものであるべきであり、その形式は、授業において、教師と学習者、学習者と学習者の間におけるインターアクションの展開に適しているものであるべきとしている。そして、授業の時間的制約を考え、大量の知識の補強の練習や技能訓練などは、授業外で行われるべきだとしている。

また、「模倣型練習」、「創造型練習」、「タスク型練習」のような分類もできるという。右に行くほど、コミュニケーションの度合いと自由度が高くなり、創造性と主体性が求められる。そして、この3種類の練習はどれも必要であり、バランスの取れた練習構成が学習者の目標言語能力の向上に欠かせないと述べている。

また、2.1節でも紹介した郭他（1995）では、練習設計の原則について「4つのなければならない」を提示し、教科書の練習を考える際に、学習者や教師、授業活動、技能訓練などの要素をすべて考慮する必要があると主張している。

以上を踏まえ、先ほど見た12冊の教科書のトップ10の練習について改めて見てみよう。

まず、授業内練習と授業外練習という観点からみると、これらの練習は、「教えた内容を即時に復習したり、補強したり、教育効果に対してすぐにフィードバックが得られる」という点においては、有効的かもしれない。しかし、その形式は「授業において、教師と学習者、学習者と学習者の間におけるインターアクションの展開に適しているもの」になっているとは言い難い。なぜなら、それらの練習はほとんど学習者一人でも完成可能なものばかりだからである。また、郭他（1995）のいう「4つのなければならない」原則を考えると、これらの練習だけでは、教師は大量の時間を割いて別途練習を考えなければならなくなるため、授業全体の進行や教師と学習者、学習者と学習者間のインターアクションをいかに作り出すかについて考える時間が奪われてしまう恐れがある。

また、「模倣型練習」、「創造型練習」、「タスク型練習」という観点からみると、上記トップ10の練習はほぼすべてが「模倣型練習」であり、比較的難易度の高い「タスク型練習」はおろか、「創造型練習」の要素もほぼ皆無である。これでは、とても三者のバランスがとれた練習構成になっているとは言い難い。それらの練習は、インプットの補強には適しているかもしれないが、練習形式が機械的で、コミュニケーションの度合いが低く、自由度も低い。これでは、成人学習者の創造性が阻害される危険性があり、コミュニケーション能力の育成にも適していないのではないかと思われる。

## 5.2 他の国における中国語教科書の特徴との関連

この節では、他の国における中国語教科書練習の特徴との関連で考察を行う。

陈・杨（2015）では、アメリカ、日本、韓国の3か国で広く利用されている中国語教科書<sup>9</sup>の練習について、練習に見られる学習ストラテジー<sup>10</sup>の相違という観点で比較分析を行

<sup>9</sup> アメリカの中国語教科書は『中文听说读写』（Integrated Chinese）、日本の中国語教科書は『新編实用汉语课本』（新編实用漢語課本）、韓国の中国語教科書は『多乐园掌握汉语』であった。

<sup>10</sup> Oxford（1990）によると、学習ストラテジーとは、知識の獲得、蓄積、想起、情報の使用を助けるため

っている。その結果、アメリカの中国語教科書練習では、「社会的ストラテジー」と「認知ストラテジー」の「自然の状況の中で練習する」というものが高頻度であるのに対し、日本の場合は、「認知ストラテジー」の「演繹的に推論する」と「繰り返す」と「記憶ストラテジー」の「イメージを使う」が他の 2 国より高いということが明らかになっている。また、韓国の場合は、「認知ストラテジー」の「訳す」が多く見られたという。

陈・杨 (2015) の研究は、学習ストラテジーの観点から教科書練習の特徴を分析するという点において参考になり、調査結果に関しても納得のいく部分が多い。しかし、あくまでも各国の中国語教科書 1 冊ずつのみの比較であるため、一般化が難しいと思われる。

本研究は、学習ストラテジーの観点から教科書練習を考察するというものではないものの、上記陈・杨 (2015) の研究結果を異なる面から検証することは可能かと思われる。

実際、今回の調査結果を見るとわかるように、陈・杨 (2015) の研究結果をサポートする部分とそうではない部分がある。サポートする部分は、例えば、日本の中国語教科書では、「認知ストラテジー」の「演繹的に推論する」(例えば表 5 の②、③、⑩)と「繰り返す」(例えば表 5 の④)と「記憶ストラテジー」の「イメージを使う」(例えば表 5 の⑫)の練習が多く見られた点である。そして、アメリカの中国語教科書に多く見られた「社会的ストラテジー」と「認知ストラテジー」の「自然の状況の中で練習する」というのが日本の中国語教科書には非常に少ないということもそうである。一方、異なる点もある。陈・杨 (2015) の研究結果では、3 か国の教科書の中で、韓国の教科書は「認知ストラテジー」の「訳す」が多かったというが、本研究の調査結果では、890 もの練習の中で、「日本語から中国語への翻訳」という練習が一番多かった。このように、調査対象の教科書の冊数や種類によって、異なる結果が出てくる可能性があるといえよう。

陈・杨 (2015) は、研究結果について、1) 3 か国の中国語教授法の影響、2) 授業規模の制限、3) 学習者のニーズといった観点から分析し、日本で使用する中国語教科書を作成する際に、現地の中国語教育の特徴を踏まえ、「語の代入練習」や「文の変形練習」など学習者単独でも完成可能な練習を適宜考える必要がある (p285) と指摘している。

しかし、本研究の調査結果でもわかるように、「語の代入練習」や「文の変形練習」など学習者単独でも完成可能な練習は、もはや十分すぎるほどあるといっても過言ではない。日本の中国語教科書に必要なのは、むしろアメリカの教科書に多く見られる「社会的ストラテジー」と「認知ストラテジー」の「自然の状況の中で練習する」を反映させた練習なのではないかと思われる。

### 5.3 第二外国語としての中国語学習を教材で支援するために必要なこと

3.1 節において、本研究の分析対象の教科書は、いわゆる中国語専攻の教科書ではなく、第二外国語としての中国語授業での使用を想定されて作成されたものと述べた。では、日本の第二外国語としての中国語教育の現状はどうであろうか。

---

に学習者が使う様々な操作である。

郭（2014）は、第二外国語の中国語は教養科目であると同時に、外国語科目でもある。そのため、授業目標として、外国語科目としての「実践性」ということを忘れてはならないと指摘している。実際学習者側も、多くの学生は、第二外国語の中国語授業を単なる教養科目としてではなく、「外国語」科目として、授業をとらえている（郑 1997）。つまり、授業では、単に中国語の仕組みや関連の中国文化などを理解させるだけでなく、習ったものを実際のコミュニケーションにおいて使えるものにするということが求められているのである。しかし、これまでの分析で見たように、現状の練習項目だけでは、学習者のニーズに十分に答えられない恐れがある。

外国語教育において、「教科書を教える」のではなく、「教科書で教える」という考え方があり。つまり、教科書の内容を機械的に教えるのではなく、目の前の学生のニーズに応じて、適宜教科書の内容をアレンジしていく必要があるという考え方である。この考え方について否定するつもりはないが、1つ注意しなければならないのは、教師の「創意工夫」ばかり強調され、教科書の改善を疎かにしてはいけないことである。両者はお互い関係しており、同じ「創意工夫」であっても、質の異なる教科書では、結果が大きく違ってくる可能性が十分にある。また、「創意工夫」を行う教師に関していえば、一般的に教授経験の少ない教師ほど、教科書への依存度は高く、効果的な「創意工夫」が難しいと思われる。

教科書とその使用者である教師について、柴原・島田（2008）は次のように述べている。日本語教材の使用者である日本語教師は、海外ではその 7 割が非母語話者教師であり、国内ではその 5 割がボランティア教師である。非母語話者教師は、体系だった日本語教授法を学ぶことがないまま教師になる場合が多く、ボランティア教師も生活支援としての教授法を学ぶ機会が十分にあるとは言えず、そのため、「教材で、新しい教授法を紹介したり、コース・カリキュラムデザインのモデルを提供したりするという教師教育の観点が教材に求められる」と述べている。

柴原・島田（2008）は日本語教育分野の文献である。では、第二外国語としての中国語教育ではどうであろうか。日本の中国語教育において、現場の教師の質の問題がかねてから指摘されている。例えば、史（2008）では、現場の教師について非中国語教育専攻の非常勤講師の採用が多く、彼らは多くの場合、中国語教育の教育理論の知識が乏しく、実践的なスキルアップ研修の機会も少ないと述べている。また、専任講師のことについて、郭（2005）では、日本の大学は伝統的に中国の古典文学や古典漢語、中国文学などが重要視されており、それらの専門家は必ずしも現代中国語教育の専門家ではない。また、場合によっては、中国経済や社会を専門とする教師も大学の中国語教育に加わっているため、中国語教育の質の低下が懸念されているという。このように日本の中国語教育において、優秀な教師も多くいると思われるが、体系だった中国語教授法を学ぶ機会がないまま、教師になる場合が多いのも事実であろう。

それらの教師を支援する上で、積極的に教師研修を行うことも有効かと思われる（しかし、上記史（2008）にあるように、実際は教師研修の機会は少ないという）が、教師が日々

接している教科書の改善というアプローチも有効だと考える。

その意味で本研究のように、まず現状を知った上で、今後は教科書の練習設計において学習者の学習のみならず、教師教育の視点（教師支援）も取り入れ、教科書改善を図っていく必要があるのではないかと考える。

## 6. まとめと今後の課題

本研究では、日本国内で出版され、常用されている初級中国語教科書について分析を行った。結果を次のようにまとめられる。

まず、教育研究において、教科書の重要構成部分であるにもかかわらず、教科書の練習部分に焦点を当てた研究が少ないことを指摘した。

次に、12冊の教科書における練習を調査した結果、ばらつきはあるものの、全体的に練習の量が少ないことがわかった。具体的に言うと、課で導入される文法項目に対して、練習の量が少ない、また、年間30コマの時間に対して、練習の量が少ない、この2点である。

また、練習の種類に関しても、とても豊富であるとは言えず、学習者に飽きられてしまう恐れがあり、学習効果に悪い影響を来す可能性が十分にあると思われる。

さらに、練習の形式について、トップ10が全体の7割以上を占めており、どの教科書でも似たような練習形式であった。また、いわゆる機械的な「模倣型練習」が多く、コミュニケーションの要素が多く、自由度の高い「創造型練習」や「タスク型練習」が非常に少なかったことが明らかとなった。この現状を変えるためには、今後は後者の2種類の練習についてもしっかり考え、バランスの取れた練習構成の教科書を作っていく必要がある。

最後に、教科書を通して、学習者の学習を支援するだけでなく、教師をも支援する、つまり教師教育の観点が必要であると述べた。

本研究は、日本国内での関連研究が少ない中で、いわば初めての試みであったといえるが、研究調査の方法（練習の分類と集計）などに関して、今後さらに検討が必要である。また、12冊というある程度規模のある調査であったとはいえ、より確実に主張ができるよう、今後さらに大規模な調査が必要であると考えられる。

### 【参考文献】

清原文代(2015)「これからの中国語教材」『中国語教育』13号, pp.58-74.

侯仁峰(2012)「中国語教科書に見られる不自然な点について」『県立広島大学人間文化学部紀要』7号, pp.87-101.

町田茂(2004)「中国語教育と教材開発の課題」『山梨大学教育人間科学部附属教育実践総合センター研究紀要』第9巻, pp.47-52.

柴原智代・島田徳子(2008)「これからの日本語学習を教材で支援するために必要なこと」『日本語教育論集』24号, pp.33-47.

- 陈楠·杨峥琳(2015) 基于学习策略的汉语教材练习本土化研究,《世界汉语教学》第2期, pp.277-287.
- 方绪军·李翠(2015) 汉语教学中试题与习题辨异,《世界汉语教学》第2期, pp.265-275.
- 郭春贵(2005) 日本的大学汉语教育问题,《世界汉语教学》第4期, pp.91-97.
- 郭春贵(2014) 1周2节课2外汉语教学模式探讨-以广岛修道大学为例-,《中国语教育》12号, pp.1-11.
- 郭志良·杨惠元·高彦德(1995) 《速成汉语初级教程·综合课本》的总体构想及编写原则,《世界汉语教学》第4期, pp.86-94.
- 刘颂浩(1996) 多项选择题应用中的一些问题,《语言文字应用》第1期, pp.50-54.
- 刘颂浩(1999) 注释式词语练习试析,《汉语学习》第4期, pp.43-46.
- 刘颂浩(2009) 对外汉语教学中练习的目的、方法和编写原则,《世界汉语教学》第4期, pp.111-120.
- 刘颂浩·汪燕(2003) “把”字句练习设计中的语境问题,《汉语学习》第4期, pp.59-66.
- 石汝杰(2004) 日本的汉语教科书及其出版情况介绍,《世界汉语教学》第2期, pp.105-109.
- 史小龙·浮根成·兰希(2013) 对外汉语听力教材练习形式分析,《青海师范大学学报(哲学社会科学版)》第6期, pp.108-111.
- 史有为(1997) 伊地智善继先生谈日本的汉语教学,《世界汉语教学》第4期, pp.109-112.
- 史有为(2008) 教学法和教学模式的解析与重组-兼及日本汉语教学中的相关课题,《世界汉语教学》第3期, pp.87-98.
- 杨翼(2010) 对外汉语教材练习题的有效性研究,《语言教学与研究》第1期, pp.24-30.
- 赵金铭(1998) 论对外汉语教材评估,《语言教学与研究》第3期, pp.4-19.
- 周健·唐玲(2004) 对外汉语教材练习设计的考察和思考,《语言教学与研究》第4期, pp.67-75.
- 郑丽芸(1997) 日本大学汉语教学一瞥,《世界汉语教学》第1期, pp.107-111.
- Oxford, R. L. (1990) *Language Learning Strategies*, Newbury House.

#### 【付記】

本稿は、2017年10月22日に韓国延世大学で行われた「The 9<sup>th</sup> International Conference of Asia-Pacific Consortium on Teaching Chinese as an International Language」で発表した原稿に修正を加えたものである。なお、本研究は平成29年度大分県立芸術文化研究費特別枠の補助を受けた。